

檀林調査報告

養安寺檀林について

植田 観樹・山口 裕光

(日蓮宗現代宗教研究所研究員)

(1) 所在地

上総国(千葉県) 山武郡養安寺村の金峯山蔵王寺に設けられた檀林。

※ 『禁制不受不施派の研究』(以下、『禁制』と略す)には、山武郡大和村とする。

(2) 名称について

(1) 碑文谷檀林——武州碑文谷法華寺には、もと碑文谷談所があったが、戦国期末ごろ消滅してしまった。これは各本寺学室とも同様であった。のち不受不施義隆盛の頃、碑文谷法華寺十三世守眼院日晴(?——一六六四)が、蔵王寺に碑文谷檀林を設けた。

※ 『禁制』には、日晴は法華寺十二世

(2) 養安寺檀林——埴谷長光寺所蔵、法華寺十三世、同檀林二祖勸持院日禅の本尊によると、この蔵王寺の談所は養安寺檀林と呼ばれている。

※ 『禁制』には、日禅は法華寺十四世

(3) 山田談所——当時の受・不受に関する文書には、上総山田談所といっている。

(3) 碑文谷法華寺について

弘安年間（一二七八〜八八）、中老日源が天台宗法服寺を改宗したものの。第十一世修善院日進は、身池対論により信州上田へ流される。不受派の本寺。

(4) 檀林の開基日晴と開講に至る経緯

日晴は碑文谷法華寺第十二世であることは先述したが、この頃、寛永七〜八年（一六三〇）池上の中妙院日観により野呂檀林が設けられ、また長遠院日遵によって玉造檀林が寛永十四年（一六三七）に造られ、また松崎檀林も盛んになるなど、不受不施義の隆盛にもなつて、いずれも不受派学徒の一大拠点となり、大いにその勢力を上げた。こうした中で、小西談所が寛永八年（一六三二）身延に接収され、不受派学徒は離散するところとなつた。ここに、養安寺檀林は、小西・中村を追われた不受派学徒を收容するために開かれたものと考えられよう。これらの学徒を收容して大きくなつた養安寺檀林は、先述の松崎・野呂等とともに不受派の人材養成のための教育機関として重要な位置をしめるものであつた。

(5) 二祖日禪と養安寺檀林の消滅

日禪は、松崎・野呂各檀林の能化を歴任している。碑文谷法華寺の第十四世であつたことは先述したが、著書に『悲田記』一卷がある。寛文五年（一六六五）小湊誕生寺日明、谷中感應寺日純等六カ寺と悲田手形を幕府に提出して、信徒は無論、世人からも指弾されることになる。

のち元禄十一年（一六九八）十一月、碑文谷法華寺、同末寺谷中感應寺は天台宗に改宗せしめられる。従つて養安寺檀林は名実共に消滅する。

※寛文の惣滅以後元禄十一年までの経過については、『日蓮宗事典』『禁制』とも明らかにしていない。また蔵王寺については全く説かれていない。

身池対論(寛永七年一六三〇)後、不受不施派の学問的一拠点となった碑文谷檀林は、いわゆる関東八檀林の内にも入らず、これまでその存在さえも不明確であった。しかし昭和五十八、九年の現宗研調査により、宮崎英修現宗研所長(現身延山短大学頭)指導の下、地元の山田勝義千葉東部宗務所長・飯塚通允長光寺住職など多くの方々のご協力を頂き、その跡を訪ね、また関係寺院等に格護されている過去帳など什物を拝見することも出来た。学事機構等、まだ不明確な点も多いが、その所在地と、得られた資料内容を報告する。なお、まとめるに当たり、藤崎英正師から適切な指導を頂いた。謝意をこめて付記する。

(1) 現住所

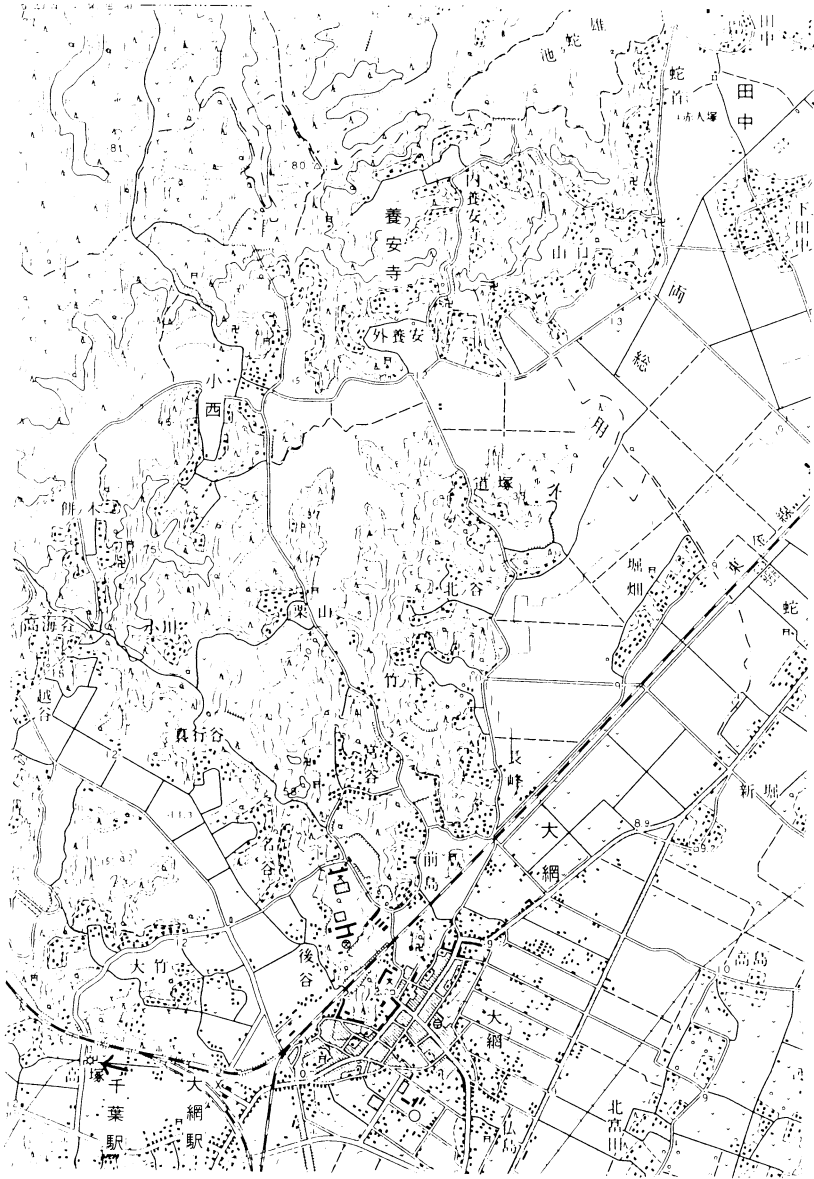
現住所は「千葉県山武郡大網白里町養安寺字宮下九一〇」、国鉄大網駅の北方約四キロメートル、身池対論裁決の翌年、寛永八年夏、身延に接収された小西檀林の東方、小高い丘を超えた約一キロメートルの所にある。今残っているものは旧跡地を示す石碑や、歴代碑等だけであるが、その周りの跡地と思われる所には無地主の田畑が広がり、発掘すれば遺物の発見される可能性もある。また、すぐ近くの丘の上には、地区の氏神であり、寺号の一つの由来と考えられる御嶽神社という、弘文天皇(六四八〜六七三)を祀る神社がある。図示すると、次のようであった。

(2) 石碑

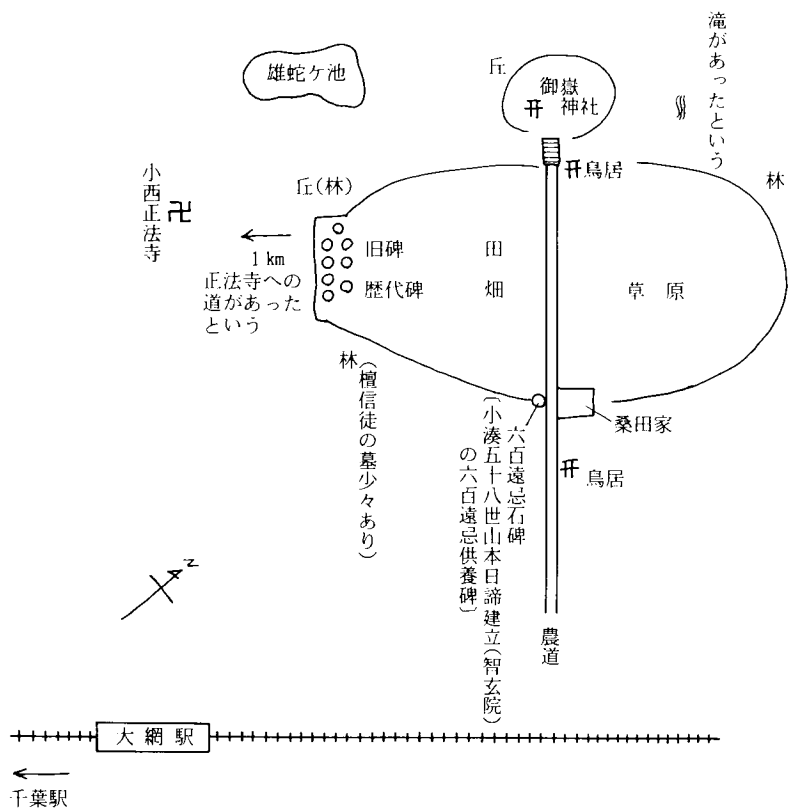
現存する石碑は、同寺入口付近と思われる農道に建てられている。六百遠忌の記念碑と、本堂裏側あたりと見られる場所にある旧碑三、歴代碑五がある。近くの本成寺(大網白里町養安寺六三二)歴代碑には、蔵王寺歴代の名も見られるということだが、今回は調査できなかった。

(一) 六百遠忌記念碑

山武郡大網白里町養安寺付近



養安寺檀林跡



首題が刻まれた高さ一二七cm、幅一二五cmの大きさで、首題の下に「小湊日諦」、横に六百遠忌、裏に六百遠忌正当の明治十六年十月十二日の日付と、施主の氏名が連ねられている。小湊日諦とは、小湊山誕生寺五十八世智玄院日諦（明治三十八年寂）のことであろう。蔵王寺は排仏毀釈の嵐が吹き荒れた頃、明治六年十月六日に炎上したといわれ、惜しんだ日諦上人が記念碑を建立されたようである。小西正法寺総代長島直氏（六十五歳）によれば、炎上後の全檀家十四軒は正法寺に入檀したとのことである。また農道をはさんで碑の対面にある桑田家には、蔵王寺の打ち鳴しを溶かして作った茶釜等があるという。

(二)旧碑・歴代碑

昭和五十二年、各碑は、土台をコンクリート造りにして、一カ所にまとめられている。計八基。

①門前にあつたと思われる碑には「檀林旧跡 金峯山御嶽寺」と記され、文化七年（一八一〇）九月、二十九世了法日慎代の建立。同寺号は後述するように、開基の時は蔵王寺で、通称として御嶽寺と呼ばれていたようである。土地の人は古来、御嶽神社を「蔵王様」と尊称して来たという。少なくとも檀林を開設（若しくは中興）した十一世日晴代は「金剛山蔵王寺」であり、山号も異なっている。恐らくは悲田停止（悲田不受不施派の禁止）となった元禄四年（一六九二）四月二十八日の、いわゆる元禄の破却後に改名せざるを得なくなつたと推察される。なお、同碑には、二十六く二十八世等の名が連ねられている（歴代譜は後述）。

②開基上人の碑は、明治十六年十月十一日に建てられ、正面に「当山開基日瑞上人」、右側面には「中興顯常院日義大徳」、左側面は十六世・十八世と思われる歴代名が見られる。その他の碑には歴代等が記され、十九世・二十世（二十五世再職）、二十三世、二十四世の名があつた。

(3)什物

(一)天 蓋

蔵王寺の天蓋が山武郡埴谷の長光寺（飯塚通允住職）に格護されている。同寺は悲田派日禪（碑文谷檀林十二世）が寛文九年（一六六九）に、千葉市中田町から現在地に移した野呂妙興寺末。一辺二メートル四方の天蓋の銘には「金剛山蔵王寺常住、中興師日晴 寛文三」等とあり、先述したように、この頃の寺号は旧碑とは異なっている。『日蓮宗年表』に拠れば、日晴は、養安寺檀林祖であり、この天蓋が奉納された翌年の寛文四年（一六六四）七月八日寂している。翌年十一月不受不施派が悲田不受派と、禁制不受派に二分裂した年であった。

(二)過去帳

文化八年（一八一二）二月、二十九世了玄日慎代に作製され、大きさは縦三十七・五cm、横二十二・五cm。同帳末尾に歴代が列せられている（カッコ内は筆者の記入）。

開基 日瑞聖人 永正十□□月五日化七五歳当寺開祖

二世 日遊聖人

三世 日保聖人

四世 日玄大徳

五世 日昌大徳

六世 日雄大徳

七世 日真大徳

八世 日泰大徳

九世 日成大徳

十世 日鷲聖人

十一世 日晴聖人 当寺檀林中興（碑文谷法華寺十三世）

- 十二世 日禪聖人（碑文谷法華寺十四世）
- 十三世 日樂大徳
- 十四世 日燄大徳
- 十五世 顕常院日義大徳 中興
- 十六世 日理大徳 宝永七庚寅正月廿五日化（修善院？）
- 十七世 運唱院日観大徳 延享二年八月十九日遷化
- 十八世 日浄大徳
- 十九世 円静院日教大徳 享保廿卯十二月廿二日化（過去帳内では日経、歴代碑には日敬）
- 廿世 付利院日脱
- 廿一世 孝静院日盛 寛延三庚午年十月十一日化（過去帳内では大徳）
- 廿二世 孝歓院付貞日現大徳 寛政四壬子年二月八日化
- 廿三世 泰明院日體大徳（歴代碑には宝歴七本朋院日體大徳）
- 廿四世 是明日能（歴代碑に本顛院日能）
- 廿五世 付理院日昌贈聖人 再住 寛政三亥七月四日化 廿世再職廿五世
- 廿六世 英雲院日慥聖人
- 廿七世 孝現院日統聖人 文政四辛巳十二月六日化 丸山浄心寺歴（丸山＝現本郷）
- 廿八世 孝善院日翁聖人
- 永聖祖廿九世 了玄日慎号本徳院 文化五辰年六月十五日入院

下谷法養寺十三世日慥弟子（下谷法養寺は現池上法養寺）

永聖免許御本尊并許狀被下永_中為重宝者也

父、内藤丹波守政苗

三十世 迢順院日衛字弁妙 文化十四_年八月六日入院 甲州大野本遠寺日迢弟子

三十一世 琢妙院日貫字琢如 文政九_年二月入院淺草本法寺日經弟子

三十二世 等寿院日禪字琢源

三十三世 祥立院日道字勝賢

三十四世 良寿院日善字琢源

三十五世 追政院日宙

三十六世 堯政日律 慶応四_年五月入院 丸山前浄心寺日照弟子

(4) その他の史料

(一) 日禪上人筆ご本尊

埴谷長光寺には、日禪の曼荼羅ご本尊が数幅格護され、その内、寛文九年（一六六九）九月に認めたものには、「碑文谷法華寺十四世日禪」「野呂妙興寺 養安寺村藏王寺 松崎村妙講寺 顕実寺 三談所兼職也」と記される。また『日蓮宗事典』に、墓碑によつて、日禪が寛文七年に流罪になつたという説は誤伝となつてゐる（六二〇頁）が、このご本尊の年代からも、悲田説主張によつて寛文七年に佐渡流島せられたというのは、否定されることになる。

(二) 日禪墓碑

長光寺住職によれば、延宝四年（一六七六）に造立された同寺の碑に「三談嗣法」と見られ、これによつても三つの檀林を兼職したことが確認されることになる（但し、日禪は延宝五年七月十一日寂）。

以上が今回の調査内容である。近在の本成寺歴代碑など、調査する点はまだいくつか残されており、全貌を解明す

るには、今後の地道な調査研究が必要である。調査を通して、不受不施義の今日的意義、為政者や教団内の反対派からくる外的圧力に対しての学問機構の保護、碑文谷檀林の学僧が持っていたであろう信仰に根ざした学問的研究の態度を貫ぬける場の設置などを、さらに調査研究しなければならない問題点が多く考えられた。

参考文献

『日蓮宗事典』

宮崎英修著 『禁制不受不施派の研究』

第十八回中央教化研究会議

一、開催趣旨

(1)宗徒（僧俗）一体の「お題目総弘通運動」について理解しあい、この運動をどのように推進していくべきかを話しあおう。

(2)信行会づくりと信行会の活動を充実させるために、「だれにでもできる信行会」「だれにでもとりくめる信行会活動」について話しあおう。

二、統一テーマ —— 生き生きとした信行会づくりを通して、お題目の輪をひろげる運動に、みんなでとりくもう——

三期 日 昭和六十年九月四日（水）・五日（木）

四、会 場 東京都大田区池上本門寺・朗峰会館

五、会議形式 1、全体会議

基礎報告 石川教張師（現宗研主任）「宗徒一体のお題目総弘通運動と信行会活動」

2、分散会（体験発表「私のとりくんでいる信行会活動」と討議）

討議ポイント

- ①この一年間、どんな信行会活動をしましたか。
- ②社会の人は今、お寺に何を求めていると思いますか。
- ③信行会活動を蘇生させる妙案は何だと思いますか。
- ④家庭や社会に於ける信行生活をどう指導していますか。

第十八回中央教化研究会議要望事項

- ⑤ 信仰の仲間づくりにとりくんでいますか。
- ⑥ 信行会について寺院間の協力をどのように推進していますか。
- ⑦ 本宗のお題目と新興宗教のお題目の違いをどう説いていますか。
- ⑧ お題目の意味と功德をどう説いていますか。
- ⑨ 二十一世紀に向かう本宗教師の使命は何だと思いますか。
- ⑩ お題目の輪をひろげる運動をみんなで考えよう。

一、「お題目総弘通運動」を宗門あげて推進すること。宗務内局は積極的に同運動の具体化を図ってほしい。

一、勸学院において、唱題の意義と功德に関する教学的解明、および創価学会・立正佼成会等「題目系新興宗教」の「題目観」と本宗のそれとのちがいを明らかにしてほしい。

一、「お題目総弘通運動」を信行会・家庭・地域社会で展開するため、現宗研は教務・護法伝道部と提携しつつ、教研会議・教化学研究集会・教化センターやさまざまな場において必要な教化資料、情報を提供交流するよう努め、同運動を具体化するための研究調査にとりくんでほしい。